

いぶき10号平成23年11月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第9回：ドナルド・ローレンス・キーン（1922年～）

明治天皇の伝記を書き始めたときどのように書くか、私には決まった態度はありませんでした。しかし調べが進むにしたがって、明治天皇という人物に感心するようになる。そして最終的には、当時の皇帝の中で世界一の存在だった、ゆえに明治大帝と言った方がいいのではないかという結論に達したのです。（出典「明治天皇を語る」新潮社）

米国ニューヨーク州ブルックリンで貿易商の家庭に生まれたキーンは9歳のときヨーロッパに旅行したことが切っ掛けで外国語の習得に強い興味を抱くようになり、奨学金を受けつつ飛び級を繰り返して16歳でコロンビア大学文学部に入学しました。18歳の時、アーサー・ウェイリー訳の『源氏物語』に感動して日本語を学び始め、角田柳作のもとで日本研究の道に入りました。キーンは2001年に『明治天皇』を出版しましたが、彼が強調したかったのは、明治天皇が十分な権力をお持ちであったにも拘らず、それを行使されなかったという点です。明治6年、皇居は火災に遭い灰燼に帰しますが、「自分の居室の為に人民を苦しませてはならない」と天皇は新皇居建設を許されず、十数年間も仮皇居で過ごされています。また、日清戦争時には明治天皇は大本営の広島にお移りになられていますが、ここでの住まいは粗末な木造二階建てで、安楽椅子や暖炉を勧められても「戦地にこのような物があるか」と固辞されたそうです。このように無私の心で国民のことを考えられ、日本と世界の平和を思われた明治天皇は、世界史上に傑出した正真正銘の名君であられました。（出典『明治天皇 上下巻』新潮社）（M.I.）